博物館 Dictionary　No.244

～あなたに語る・時代を超えて生きる心～

展示中の作品について、研究員がわかりやすく解説します。

馬―力強く、美しい相棒

身近にいた馬

馬を近くで見たことがありますか？　京都に住んでいる人は、葵祭や時代祭など、お祭りの行列や、上賀茂神社で行われる賀茂競馬で見たことがあるかもしれませんね。今は特別な場所･行事でしか見かけなくなった馬ですが、昔は、人の身近にいる存在でした。人が馬を飼いならすようになったのは、約5,500年前だと言われています。海を渡って日本に馬が連れてこられたのは、今から 1,600 年ほど前、古墳時代だと考えられています。馬は力が強く、足が速い動物です。そのため、自動車やさまざまな機械が使われるようになる前は、人を乗せて走ったり、重たい荷物を運んだりと、世界各地で人を助けてきました。昔の暮らしを描いた絵を見ると、あちこちに馬の姿を見つけることができます。

立派な馬は、立派な人のしるし

馬は人を助けてくれるだけでなく、とても魅力的な姿をしています。すらりと伸びた首や、筋肉のたくましい足、風になびくたてがみは美しく、優雅で堂々としています。人は、その美しさにも心惹かれてきました。それぞれの時代、それぞれの地域で力を持った人は、優れた馬を求め、自分のものにしました。立派な馬を持つことは、立派な人のしるしでもあったのです。

図 1
重要美術品　三彩馬俑
中国・唐時代（8 世紀）
京都国立博物館蔵
（銭高衣子氏寄贈）

図1は、今から1,200年ほど前の中国のお墓から見つかった、やきものの馬です。緑・明るい茶色・白・黒の組み合わせが、とても華やかです。この頃の中国では、えらい人が亡くなると、人や動物、道具など、身の回りのものを木や土でかたどり、一緒にお墓に埋めました。「死後の世界でも同じように暮らせるように」と願いを込めたのです。
この2頭の馬は、お墓に眠る人が生きていた時に乗った馬を写したものかもしれません。馬に乗るために必要な道具だけでなく、たくさんの飾りがついています。それぞれ違う形に整えられた、オシャレなたてがみにも注目してください。豪華に飾り立てられた立派な馬は、この馬の持ち主が、とても力を持った人であったことを示しています。

あこがれの馬

日本でも、特に武士にとって馬は欠かせない存在でした。図2は室町幕府の最初の将軍、足利尊氏がいつも戦の時に乗っていた馬を描いたものです。馬に乗った尊氏の絵があり、そこから馬だけを写して描いたそうです。この絵を描かせたのは、室町幕府の11代目の将軍、足利義澄です。義澄は、この絵をいつも身近に置いていました。あこがれのご先祖様を思い浮かべ、力を貸してほしいと願ったのかもしれません。

図2　重要文化財　駿馬図　景徐周麟賛
室町時代（15～16世紀）京都国立博物館蔵

ここに尊氏は描かれていませんが、いつも一緒だった馬を描くことで、馬の持ち主を想像させることができたのです。それほど武士と馬には強い繋がりがあったことが分かります。

もちろん武士だけでなく、いろいろな人が馬と関わってきました。美術作品には、ほかにもスポーツで活躍する馬や、神様に捧げられた馬なども登場します。馬と人との繋がりを感じながら、作品を見てくださいね。

（教育室　水谷亜希）